

# 会報 (第4号)

## 目次

- 今後の日ア関係に期待するもの
- アルゼンチン近況
- 日本の中のアルゼンチン
- 人事消息



法人団 日本アルゼンチン協会

会報第四号一九九四年四月三十日発行  
編集兼発行人 薄井康夫

千代田区内幸町一ノ二ノ二  
日比谷ダイビル一七〇五号室  
電話 (三五〇一) 四六八四番  
FAX (三五九五) 三九三二番

### 今後の日ア関係に期待するもの

アルゼンチンの経済復興の気運を契機として、21世紀へ向けての日ア関係の展開が大いに期待される折柄、当面関係各方面のご意見を読者各位にご披露致したい。

今回はそのトップを切って、慶応義塾大学商学研究科教授 <sup>うつみ まこと</sup> 内海 孚 氏の所論をご紹介します。氏は大蔵省の財務官を務められたほか、現在、大来財団日本委員会の委員を勤めておられ、この方面のエキスパートの一人であります。

ここに掲載した内容は、海外投融資情報財団の機関紙(94-3月号)より抜萃させて戴いたものです。

## ◎ 80年代以降の日亜関係

1980年代以降の日本とアルゼンチンのマネーをめぐる関係をドラマにたとえると、3つの幕があります。

第一幕の主役は、日本においては民間銀行、アルゼンチンでは膨れあがった公的セクターでした。

第二幕の主役は、世界銀行、IMF、それから米州開発銀行(IDB)、さらに日本輸出入銀行などの公的金融機関です。アルゼンチン側の主役は、強いリーダーシップによって経済再建を指導してこられた、メネム大統領とカバーロ経済大臣。

第三幕は、これから開かれようとしており、その主役は、日本の民間企業もつ人、資金、技術です。アルゼンチン側は、アルゼンチンの土壌と資源、さらにやはり人的資源、すなわち人間が最重要の主役でなければならないと思います。

## ◎宮沢プランの日本的アプローチ

第一幕の幕が降りた時点で、アルゼンチンには、ハイパーインフレとマイナス成長、巨額の対外債務、さらに、国際金融界との癒しがたい相互不信関係が残されていました。

われわれは次にどういう幕を開けるのかという問題に直面していたわけです。

第二幕を開けるに当たって、日本は珍しくアイデア、イニシアチブの面でも貢献することができました。

1988年、日本は、ラテンアメリカ諸国の債務問題への対応策として宮沢プランを提唱しました。このプランは、非常に日本的な、江戸時代の「三方一両損」という話にもとづいています。

債務国は、経済再建のため、国民に忍耐を求める厳しい政策を、不人気になるというリスクを冒してでも実行する。民間銀行は、債務の削減、あるいは利払いの軽減を行う。世界銀行、IMF、日本輸出入銀行などの公的金融機関は、民間銀行が新しい資金を出さない期間は、リスクを負って新規の資金を貸し出す。こうして、それぞれがマイナスを引き受けることで、問題の解決を図ろうとするのが宮沢プランでした。

当初、宮沢プランに反対していたアメリカも、半年後に宮沢プランを原型と

したブレイディ・プランを発表します。ブレイディ・プラン実施に際しては、日本も輸出入銀行が大規模なアンタイドローンを用意して協力しました。

アルゼンチン政府は、経済再建・健全化のため、強い決意で財政金融政策を実施し、これに対して国際的支援体制が形成されました。日本輸出入銀行はそのなかで、8億ドルのアンタイドローンを供与したわけです。

こうした自助努力と支援の結果、世界的な不況にもかかわらず、アルゼンチン経済は非常に順調な成長を遂げています。インフレは年率数千パーセントから1ケタに収まり、逃避資本もどんどん戻ってきているわけです。

### ◎対アルゼンチン投資のポイント

この第二幕が進行するなかで、新しい日本とアルゼンチンの経済関係が模索され、これが第三幕になっていきます。

経済の急速な改善によって、アルゼンチンは世界の資本市場と直接アクセスできるようになってきています。おそらく、日本との関係では円建債券を市場で出すことと思います。これまでは、銀行だけが資金を貸与していましたが、この債券を広く日本の投資家をもつことになれば、それだけアルゼンチンと日本との関係が幅の広い深いものになっていくわけです。

さらに、両国間の直接投資の展望が、今後の最大の関心事といえます。

直接投資は、単にお金を貸すこととは根本的に違います。言葉も宗教も文化も生活の仕方も異なるところに、企業が定着し、両国の人間が一種の運命共同体をつくるわけです。ですから、日亜関係の第三幕は、これまでの関係とは全く次元の異なる広がりや深さをもつこととなります。これは、両国の官民をあげた努力がなければ、成功することは困難であるといえます。

この難問に立ち向かうに当たって、ポイントと思われる点を述べたいと思います。

第一は、日本企業は、従来のアジア諸国への進出とは異なる進出パターンを考えなければならないということです。日本企業がASEAN諸国に進出したときには、どちらかといえば、良質で低コストの労働力を求めて生産拠点をつくり、製品は日本や他の外国へ輸出する形態を主眼として考えていたと思います。

しかし、このパターンはアルゼンチンには向かないと思います。アルゼンチンなどラテンアメリカへの進出には、生産拠点をおくだけでなく、マーケッ

トとしてターゲットを創り出していくことが必要だと思います。その場合に、メルコスール(南米共同市場)という地域統合、さらには将来の NAFTA (北米自由貿易圏) 拡大に備えた戦略は絶対に必要でしょう。また、アルゼンチンの総輸出の30%はEC向けであるなど、欧州市場との歴史・地理的な関係もあります。したがって、アルゼンチンへの企業進出は、対欧州戦略の一環としての位置づけも考慮してよいのではないかと思います。

第二のポイントは、言語や文化などの障害を克服するために、なんらかのシステムや工夫が必要だということです。アルゼンチンからの企業留学生の受け入れなど、さまざまな方法で人的なつながりを深めていくことが必要です。

すなわち、日亜経済関係の第三幕は、経済分野に限定してはおのずから限界があり、草の根的な広く深い文化交流が不可欠でありその発展を期待してやまないものであります。

---

### ◎青年研修員の来日 (ちょっとしたニュース)

上記の内海教授の所論にある日ア関係に於ける草の根運動の必要性にご注目下さい。

ア国青年研修員(20名)が日本側の招聘により2月23日～3月9日来日し、広島に民宿した外、京都・奈良等で日本古来文化に接しました。一行の中にはアルゼンチンに於けるテレビ俳優として有名なホルヘ高島氏も加わっており、日本文化を肌で知ったと同行の青年諸君と共に喜び、今回の訪日が大いに有意義であったことを強調しておりました。

アルゼンチン近況
----------

## ◎国内経済の概況

91年4月、カバーロ経済相によりコンバーティビリティ・プランが導入されてから3年が経過し、インフレ収束に大きな成果を挙げた。消費者物価上昇率は92年17.2%、93年7.4%と低下、94年に入ってから1月の月間消費者物価上昇率は1月0.1%、2月0%、3月0.1%と推移し3月時点での年間消費者物価上昇率は5.2%となった。

経済の回復により輸入が92年の148.7億ドルから93年には167.9億ドルへ増加した反面、輸出が伸び悩んだため貿易収支の赤字は92年の26.4億ドルから93年には36.7億ドルと拡大した。93年の主要輸出入国は以下のとおりである。

(単位：億ドル)

輸 出	1 ブラジル	27.9	輸 入	1. 米 国	38.6
	2. 米 国	12.7		2. ブラジル	35.7
	3. オランダ	12.7		3. ドイツ	10.2

経済省の発表によると94年1月の貿易収支は輸出9.4億ドル、輸入13.6億ドルであり4.2億ドルの赤字である。

93年の自動車生産台数は342,350台と92年の262,022台を大きく上回り過去の最高を記録し経済の好調さを示している。

トラックを生産しているメルセデス・ベンツ社は94年、95年の2年間で1億ドルの投資を計画している。トヨタ自動車の新規進出計画について現地新聞は概要を以下のとおり報道している。

総投資額：1.5億ドル

生 産：年間2万台 ハイラックス（小型トラック）

販 売：アルゼンチン及びブラジル

合弁のパートナー：AYL DBCAROLI 社

94年主要経済指標の政府目標は以下の通りと発表された。

実質経済成長率 (%)	6.5
消費者物価上昇率 (%)	5.0
卸売物価上昇率 (%)	3.5
輸 出 (100万ドル)	14,437
輸 入 (100万ドル)	16,252
貿易収支 (100万ドル)	△ 6,878
資本収支 (100万ドル)	+ 9,852
失 業 率 (%)	6.2

- ◎ 民営化されたアルゼンチン航空のイベリア航空による持株比率がアルゼンチン・スペイン両国政府間で協議されたが、持株比率をそれぞれイベリア航空85%、アルゼンチン政府5%、従業員10%とすることで合意に達した。又イベリア航空による5億ドルの資金援助が決められた。
  
- ◎ ラテンアメリカの経済改革の先駆者チリは域内への対外直接投資に積極的でありラテンアメリカ経済成長の牽引車の役割を果たしている。チリの公的機関によれば90～93年の間にチリは1,445百万ドルの対外直接投資を行ったが、このうち1,056百万ドルは対アルゼンチン投資であった。さらにそのうち9億ドルが電力部門へ向けられた。
  
- ◎ アルゼンチンはアジア諸国との関係強化に努めているが、マレーシア航空は3月28日よりクアラルンプールとブエノス・アイレスを結ぶ定期路線を開設した。この路線はケープ・タウン、ヨハネスブルグを經由して週2便運航され東アジアとアルゼンチンを結ぶ初の定期路線となった。
  
- ◎ メネム大統領は2月28日から3月2日の3日間、初めてスペインを公式訪問、スペイン国王、ゴンザレス首相などと会見した。

(94-4月11日 小林晋一郎)(註. 筆者は東京銀行 中南米部長)

## 日本の中のアルゼンチン

Jリーグは現在熱戦を展開し、ファンの皆様も或はそれぞれごひい気のチームのサポーターとしてグラウンドで或はテレビでお楽しみのことかと拝察申し上げます。

今回は開幕直前の各チームの動静に基く興味ある分析をお届けすることになりました。といっても編集子はズブの素人で到底その任に耐えませんが、現在日本郵船にご勤務中で、サッカーにご造詣の深いお嬢様-香川さん-のご投稿によるものです。それではどうぞ本文を――。

『94年Jリーグは去る3月12日に2年目の開幕を迎えましたが、今回は開幕前のプレシーズンマッチとキャンプの情報をお伝えします。

まずは2月26日、国立競技場で行なわれた「サンワバンクカップ」・アルゼンチンサッカー協会(AFA)の創立100周年を記念して行われたトーナメント「コパ センテナリオ」の優勝チームのヒムナシアと、Jリーグ初代チャンピオンのヴェルディ川崎が賞金1千万円をかけて対戦しました。

ヒムナシアは「コパ センテナリオ」の決勝戦で名門リバー・プレートを破っての初来日、当日の試合に備えて1週間前より来日して調整を行なうほどの力の入れよう。一方のヴェルディは本場アルゼンチンのプロチームにどれだけ通用するのか、初代Jリーグチャンピオンの威信をかけて試合に挑みました。前半ヒムナシアのセンターフォワード、ゲーラが先制点を挙げましたが、後半、三浦カズのコーナーキックが直接ゴールとなり同点、ヒムナシア得意のサイドからの攻撃で双子の弟ギジェルモが決めた勝越点も、ビスマルクの個人技によって追い付かれて結局2-2、PK戦の結果4-2でヴェルディが辛くも勝ちました。

ヒムナシアを率いたベルフーモ監督は、リバーのディフェンスとしても活躍した選手ですが、東京オリンピックにアルゼンチンチームのキャプテンとして来日して全日本のチームと戦ったことがあり、当時の全日本選手だったJリーグ川淵チアマンと試合前に堅い握手を交わす一場面も見られました。

来年以降も、この「サンワバンクカップ」が継続され、アルゼンチンのチャンピオンとJリーグのチャンピオンの対決が毎年楽しめることを願います。

さて、昨年はセンターフォワードのディアスがJリーグ初代得点王になったにも拘らず何のタイトルもとれなかった横浜マリノスが、今年はチャンピオン奪回を目指して1月下旬より約3週間弱、アルゼンチンでキャンプを行ないました。

まずはマル・デル・プラタにて基礎トレーニングの強化。猛暑の中、各選手とも体力作りを行ない、ディアス、ビスコンティ、サパタのアルゼンチン選手も元気に参加して現地のファンを喜ばせました。その後、ブエノス・アイレス、ロサリオにてリバー・プレート、ロサリオ・セントラル、ヒムナシアの強豪チームと対戦して実戦でキャンプの成果をチェック。中でもブエノスのカンチャ・デル・リバーでおこなわれたリバーとの試合は、今年よりマリノスに移籍するメディナベージョの「さよならゲーム」であり、ベージョは前半はリバーの、後半はマリノスのユニフォームを着て登場、前後半共に1点ずつをあげて試合を盛り上げました。

また、ベージョは3月12日のJリーグ開幕戦（対浦和レッズ）で、ディアスからのセンタリングを得意のヘディングで合わせて得点し、益々、今後の活躍が期待できそうです。』



人事消息 (平成6年1月1日以降)

1. 訪 亜

- 中山太郎衆議院議員(立ち寄り) 1月10日～11日
- 三輪昭外務省中南米第一課長 1月25日～27日
- 東祥三外務政務次官 3月13日～15日 メネム大統領、ディテラ外相、カバロ経済相との会談、国際関係評議会(CARI)の講演
- 大来レポート事前調査団 { I.D.C.J (国際開発センター)班(河合団長他) } 4月3日  
{ J.A.I.C.A. ミッション班(五十嵐団長他) } ~19日

2. 訪 日

- アルゼンチンからの青年研修員(20名)招聘 2月23日～3月9日
- マリオ中釜陸軍中佐(元国連旧ユーゴPKO部隊副司令官) 3月16日～26日
- ロケ・フェルナンデス・アルゼンチン中央銀行総裁 2月21日～25日
- サッカーチーム「ヒムナシア・イ・エスグリマ」 2月26日  
(注:ヴェルディ川崎と対戦し2-4で惜敗)
- ハイメ・フラギオ亜日文化協会々長(夫妻) 4月24日～5月初旬  
大阪国債見本市へ出席予定

◎協会事務局長の交替

新任 わた なべ 渡 部 とおる 透 平成5年12月まで領事として在ア日本大使館勤務。同年未定年退職に伴い帰国の上、平成6年4月1日より現職に就く。

辞任 き だ ひさ 木 田 寿 司 平成6年3月末を以て退職し、独立して文化活動(タンゴ)に精進される予定。

お 知 ら せ

◎ 講 演 会 :

上野学園大学に於ける講演会：司会 同大学長 石 橋 裕 氏  
講師：山本 学（前駐ア日本大使、フレッチャ国際法外交大学院客員研究員）  
演題：ラテンアメリカにとって「今」とは何か……アルゼンチンを中心として。  
日時：5月14日（土） 午後4時30分～6時  
会場：上野学園 TEL 03-3842-1021

J R = 上野駅下車8分  
地下鉄日比谷線 = 上野または入谷駅下車8分  
地下鉄銀座線 = 上野または稲荷町下車8分

◎ 総 会 : (正会員には別途に通知発送)

社団法人「日本アルゼンチン協会」第38回通常総会は来る5月18日（水）  
午後2時30分～3時30分 於「内幸町 日比谷ダイビル 4階会議室」

あ と が き に 代 え て

○今般3年振りに在アルゼンチン日本大使館から帰国し、奇しくも当協会へ勤務することになりましたが、微力ながらも精励致す所存でございますので、今後共格別のご指導ご交誼の程よろしくお願い申し上げます。

渡 部 透 (新任 事務局長)

○次号は7月末発行予定。

以 上